

新型コロナウイルス対策下における保育現場の現状報告

— 初任者研修に参加した保育関係施設職員へのアンケート調査から —

久留米信愛短期大学幼児教育学科

園田 和江(8034)

キーワード：新型コロナウイルス対策 保育現場の状況 保育職の重要性

【研究目的】

我々が予想しえなかった新型コロナウイルスの蔓延により、これまでの感染症対策で対応できるのかどうか、何をどこまで行えば感染予防に繋がるのかなど、手探り状態の中で試行錯誤し、子どもと保護者、保育者のそれぞれの命を守るための取り組みが始まった。特に保育現場は、保護者の生活を守るため、また、医療従事者などのエッセンシャルワーカーを支えるために子どもを預かって社会のシステムを支えるという重要な役割が日本中で再認識された。

新型コロナウイルスの正体ははっきり分からないまま始まった緊急事態宣言下、そしてそれが解除された後の現在の状況において、保育現場での実際の取り組みについてアンケート調査を行うことによって、その時に保育現場がどのように対応してここまで取り組んできたのかを検証する。

【研究の視点】

新型コロナウイルスの蔓延により保育現場はこれまでにない状況で保育を行う中、保育者自身の研修の機会も奪われようとしていた。しかし、緊急事態宣言が解かれ、特に感染者の少なかった宮崎県(4月11日時点で17人、18人目の感染者は7月15日)¹では、保育者向けの研修会を宮崎県社協が独自のガイドライン(令和2年6月4日付)を作成²し、感染予防策を徹底した上で開催された。感染者数が落ち着いた状況下であったが、研修日は、緊張感が張り詰めていた。

だからこそ、県内各地から参加する保育者が時間を取り、一堂に会することは保育者自身にとっても情報交換をする貴重な場であった。しかし、三つの密を避けること、ソーシャルディスタンスを取ることに於いて活発な意見交換は困難であった。そのため、研究に同意して下さった方々にアンケート調査をし、その結果をお返しすることは、これからの予防や感染拡大防止に向けて、また、保育者としての仕事の重要性を再認識し、お互いをエンパワメントすることに本研究が一助となるという視点である。

厚生労働省は4月7日付の「緊急事態宣言後の保育所等の対応について」³において、地域の感染状況を踏まえつつ、保育の提供を縮小して実施すること、あるいは、臨時休園を検討することとしながらも、以下のように、なるべく開所するよう通知している。その部分を抜粋する。抜粋：(1) 保育所については、保護者が働いており、家に1人であることができない年齢の子どもが利用するものであることから、感染の予防に留意した上で、原則として開所いただくようお願いしている。(2) 一中略一子どもの保育が必要な場合の対応として、訪問型一時預かりや保育士による訪問保育、ベビーシッターの活用等の代替措置を講じていただくようお願いしている。

(3) においてはさらに、「保育所等における新型コロナウイルスへの対応にかかる Q&A について」(令和2年3月5日付事務連絡)において、保育士等が不足しやむを得ない場合に、仕事を休んで家にいる保護者に、市区町村の要請に基づき、園児の登園を控えるようお願いすることが考えられることとしている。

¹ 宮崎県新型コロナウイルス感染症対策特設サイト https://www.pref.miyazaki.lg.jp/kansensho-taisaku/covid-19/hassei_list.html

² 宮崎県社会福祉研修センターにおける新型コロナウイルス感染症の発生予防及び発生時対応ガイドライン http://www.mkensha.or.jp/kenshu/file/ind_guidelines.pdf

³ 厚生労働省事務連絡令和2年4月7日

<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000619788.pdf>

2. 略(1) 放課後児童クラブについては、共働き家庭など留守家庭の小学校に就学している子どもを対象としており、特に小学校低学年の子どもは留守番をすることが困難な場合があると考えられ、感染の予防に留意した上で、原則として開所いただくようお願いしている。(2) 中略 子どもの預かりが必要な場合の対応として、子育て援助活動支援事業(ファミリー・サポート・センター事業)やベビーシッターの活用等の代替措置を講じていただくようお願いしている。(厚生労働省事務連絡令和2年4月7日)

上記の厚労省の通知を踏まえると、保育職への期待と重圧がかかっており、保育職自身が子育て中の場合も、わが子は留守番しながら自身は職場に出向くという事例も十分あり、また自己犠牲を払いながらも差別や偏見に立ち向かわなければならないという状況の中にいたことがわかる。この状況下において、保育を支えている保育職に、緊急事態宣言下と現在において現場がどのようになっていたかを知ることは重要であると考えられる。

【方法】

対象者は、2020年6月30日(火)に宮崎県社会福祉協議会主催の「福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程」の記録技術研修(保育、児童)に参加した76名の初任者(新卒入職後3年以内の職員、もしくは他業界から福祉現場へ入職後3年以内の職員)である。緊急事態宣言が解除され、新型コロナウイルス対策とこれまでの日常生活を新しい生活様式と共に過ごしながら保育活動を行わなければいけない状況であり、それを理解し受け止めて保育を行っている状況であった。緊急事態宣言下と現在の状況において保育現場で何が起こっていたのかを、この少し落ち着いて保育者が振り返られる時期として、アンケート調査を行った。

【倫理的配慮】アンケート調査に当たっては、受講者に研究の目的と内容、個人や職場名は一切出ることなく、結果は対象者に結果をお伝えすることを説明し、同意して下さった方に行った。アンケート調査については、本学の倫理委員会で承認されている。

【研究結果】アンケート調査の回収率は96%(76名中73名)であった。

1. 対象者の概要

1) 保育職の性別と年齢 女性71名、男性2名。年齢は、20代45名、30代8名、40代5名、50代5名、60代1名であった。

2) 事業所種別 乳児院2名、児童養護施設2名、障がい児発達支援事業4名、児童クラブ1名、保育所59名、児童館2名、障がい児福祉施設0名、その他2名、記述無し1名であった。

3) 職種 指導員(生活支援員、職業指導員等)4名、保育士36名、保育教諭25名、看護職5名、その他の業務(臨時等)3名であった。

2. 緊急事態宣言下と現在の状況(同じ質問項目による比較)

1) 施設に不足していた物、不足している物(複数回答)

緊急事態宣言下ではマスク(53人)、アルコール消毒液(31人)、薬用ハンドソープ(23人)の順で不足していた。現在ではマスク(17人)、その他(特になし)が12人、アルコール消毒液(7人)の順で不足している。

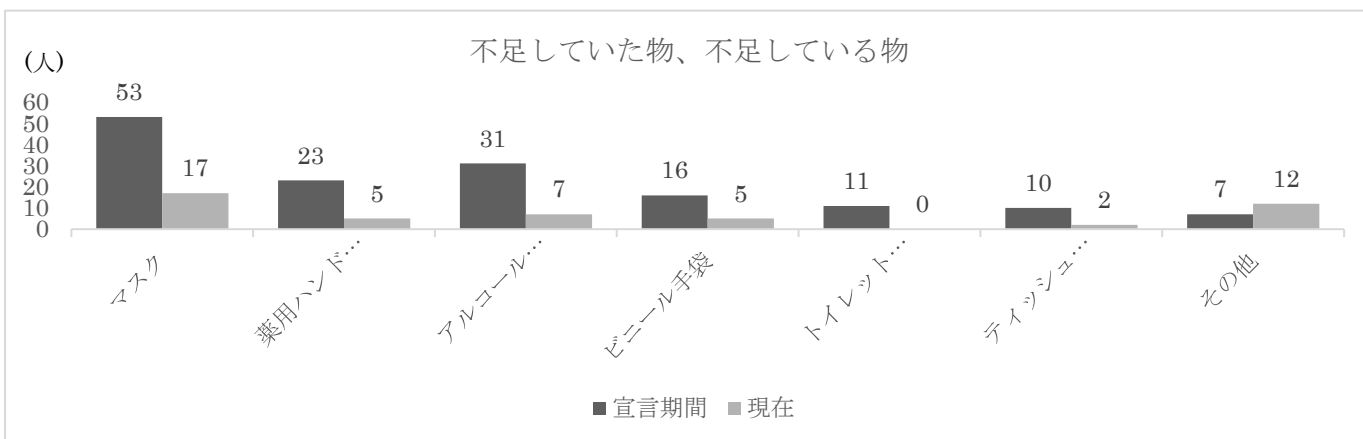


Fig. 1 不足していた物、不足している物

2) 保育現場職員、施設職員として困り事

緊急事態宣言下では自分が知らない間にコロナに罹っていて子どもにうつさないかと不安だった(38人)、現在では特になし(32人)、通勤の途中で自分がコロナに罹る可能性があり不安(29人)が特に多い。

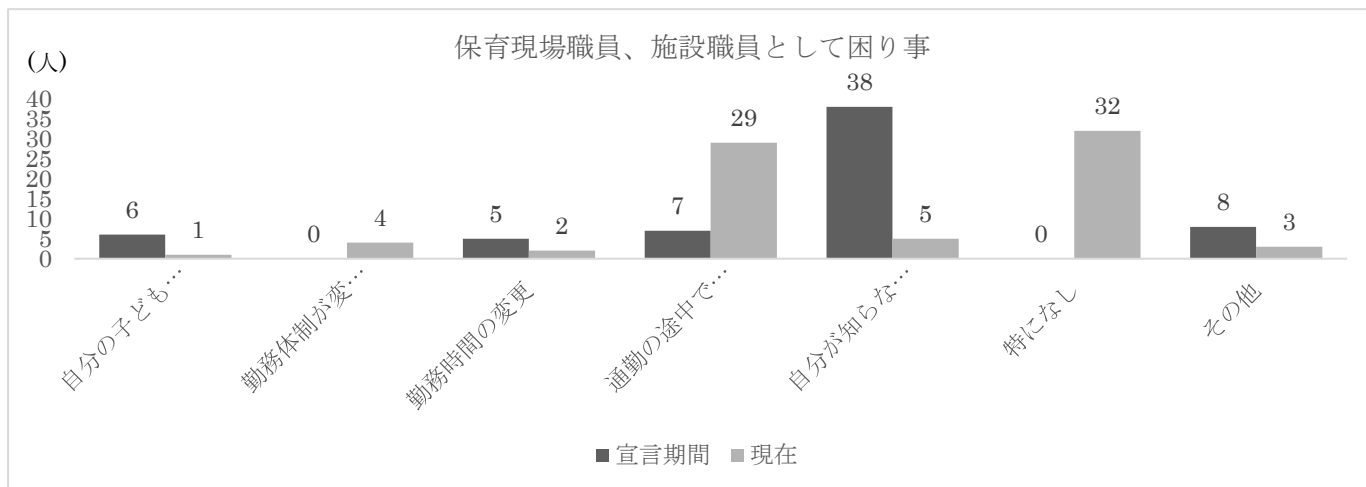


Fig. 2 保育現場職員、施設職員として困り事

3) 新型コロナウイルス対策で子どもに教えていること

緊急事態宣言下、現在のどちらにおいても、手の洗い方(63人/57人)、友達とくっつかないこと(14人/11人)、大声で話さないこと(11人/4人)を教えている。

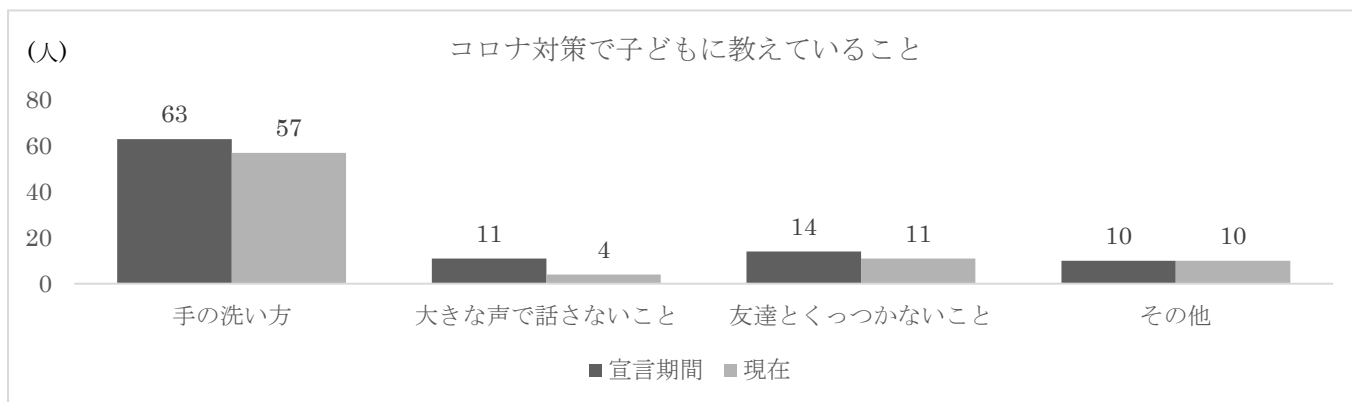


Fig. 3 コロナ対策で子どもに教えていること

4) 3密を避けるための工夫

緊急事態宣言下、現在のどちらにおいても、換気(61人/65人)と保護者への呼びかけ(44人/19人)が特に多かった。

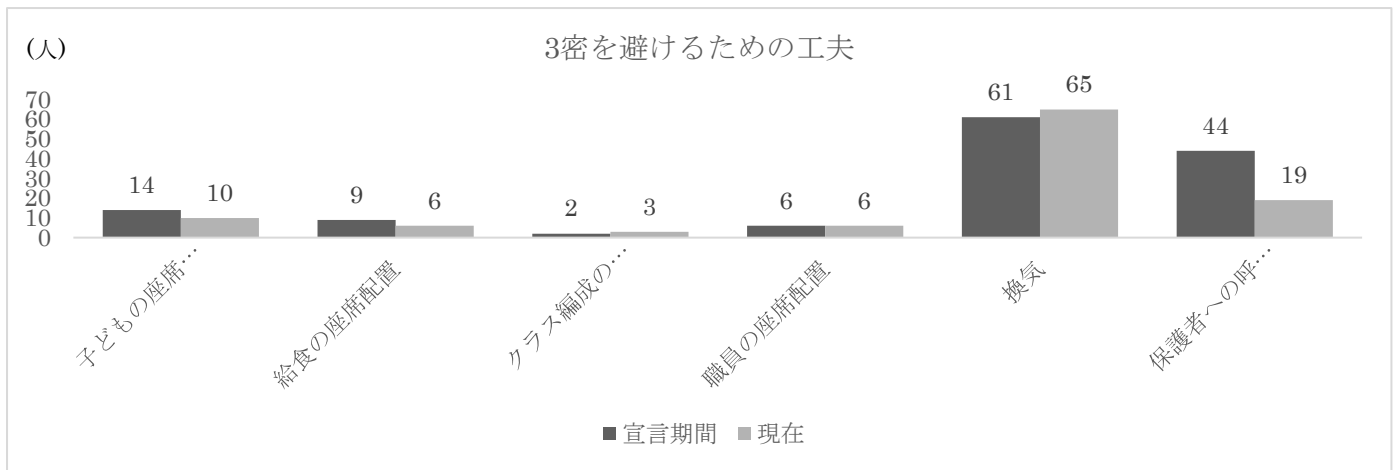


Fig. 4 3密を避けるための工夫

5)消毒箇所について

緊急事態宣言下、現在のどちらにおいてもテーブル(59人/57人)、トイレ(50人/48人)、おもちゃ一つずつ(48人/44人)の順であった。

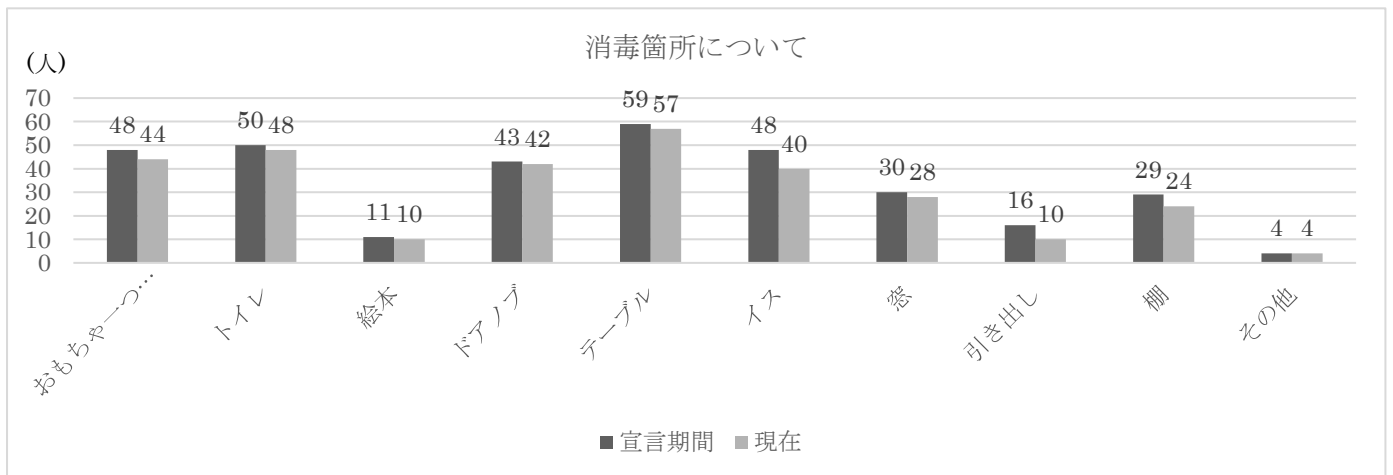


Fig. 5 消毒箇所について

6)施設の入り口での消毒

緊急事態宣言下、現在のどちらにおいても、している(52人/49人)が一番多かった。

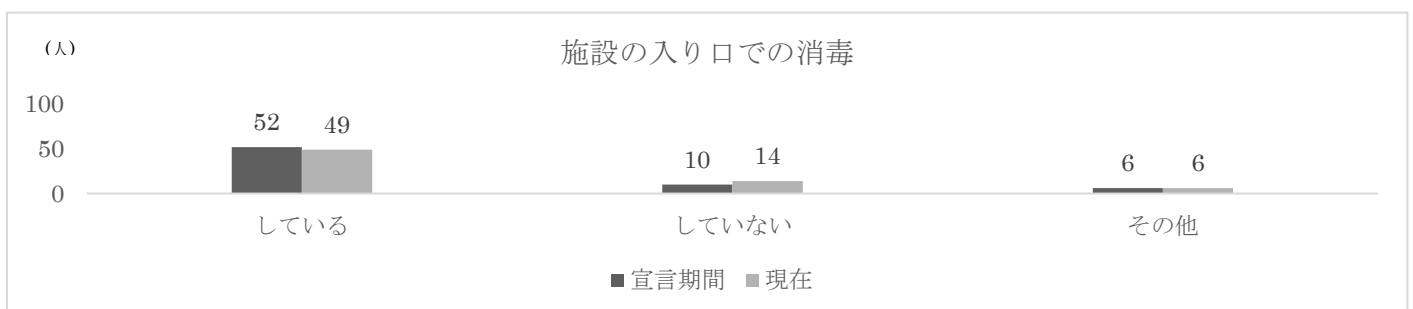


Fig. 6 施設の入り口での消毒

7)消毒の頻度について

緊急事態宣言下、現在のどちらにおいても、一日に何度も(30人/27人)、毎日(33人/34人)が特に多かった。

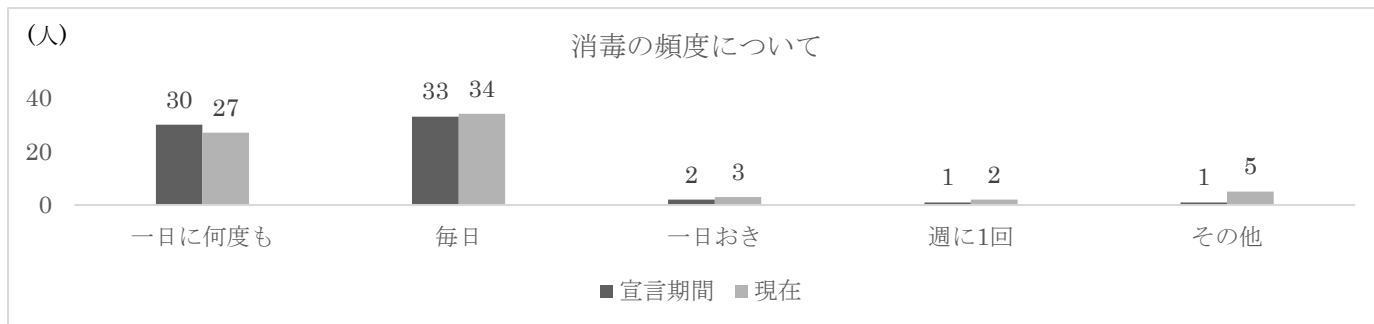


Fig. 7 消毒の頻度について

8)子どもの来所時に保護者をお願いしたこと

緊急事態宣言下、現在のどちらにおいても、子どもの検温(毎日測定)64人/60人、保護者のマスク着用(31人/25人)、子どものマスク着用(19人/15人)であった。

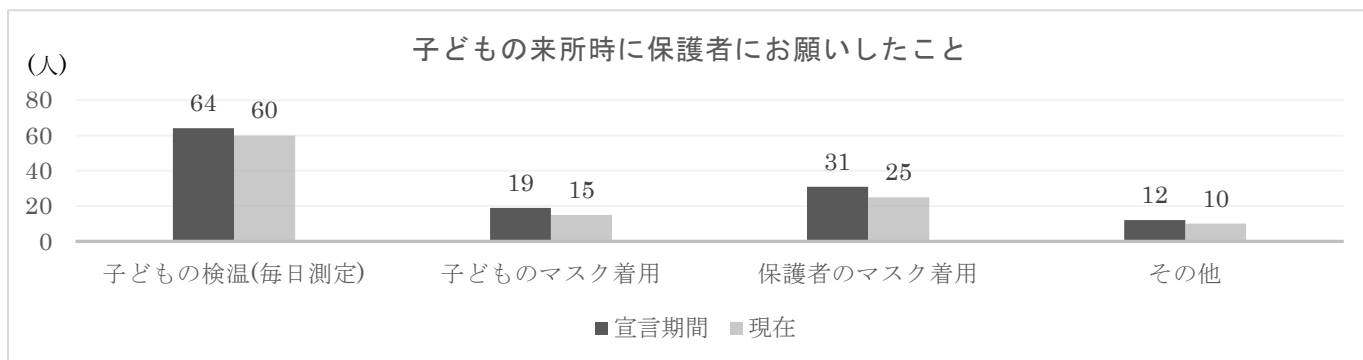


Fig. 8 子どもの来所時に保護者をお願いしたこと

9)保護者から心無い言葉、励ましやねぎらいの言葉があった

保護者からの心無い言葉は、自由回答で「ゆっくりする時間がないから預けたい。」があった。緊急事態宣言期間中の方が、保護者からの励ましやねぎらいの言葉が多くあった(24人/18人)。※詳細は自由回答の結果欄にて



Fig. 9-1 保護者からの心無い言葉



Fig. 9-2 保護者からの励ましやねぎらいの言葉

3. 自由回答の結果

1) 「緊急事態宣言下において子どもに関わる仕事の重要性で再認識したこと」

回 答(原文のまま)	読み取れること
<ul style="list-style-type: none"> ・大変な時代で、自粛や制限がある中やっぱり子どもたちが通う場所が必要な状態で保護者もそんななか仕事をしないとイケない。やっぱり自分たちのような子どもに関わる人の重要性を感じ、誇らしい。 ・子どもを預かる場が無いと社会が回らなくなる。手洗い方法を徹底して教え、これは一生ものになる。小さい頃からの習慣が大切だと改めて感じる事が出来た。保育者の関わりはその子の一生に関わると改めて責任感を感じた。 ・緊急事態宣言中でもお仕事が通常通りある保護者にとって、休園せず子どもを受け入れて見守れたことは、お父さんお母さんの少しでも救いとなれたと思うので良かった。 ・様々な行事がなくなり不安が増える中、子どもたちが過ごす園生活を出来る範囲で楽しめるように工夫や注意が必要であり、保護者も不安な中預けているため命を守る仕事だと感じた。 ・感染症が出た時、子ども達を守るために職員はどう動くのか、勤務体制をどうするのか、子どもの部屋分け、感染拡大させないための防護物品の確保、など全てのことで(少人数での24時間体制)通常の生活が出来なくなるのだということを再認識し、考える機会となった。 ・小中学校が休みになる中、なぜ保育園を休みにしないのかを考えた。⇒いまこの瞬間が一生に繋がる⇒在宅ワーク家庭への支援。 ・働く保護者にとって子どもを受け入れる場所であること。 	<p>保育の重要性について再認識したこと</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを守るうえでも、自分の体調管理をしっかりする必要性を感じた。 ・子どもの健康管理を行い、少しのことでもすぐに対応することで、保護者との連携がスムーズにできる。 ・自分だけでなく預かっている子どもが感染しないように、などの責任。 ・自分が感染源になってしまったら怖いと感じた。 ・自分がうつす側になることがあるということを再認識させられた。手洗い・消毒の徹底や保護者の心の負担など。 ・自分の行動一つで色んな人に影響することが怖いと感じた。 ・子ども一人ひとりの体調面、親との連絡帳。 	<p>保育者としての責任感</p>

2) 「コロナウイルス対策や、子どもに関わる職種として考えたこと」

回 答	読み取れること
<ul style="list-style-type: none"> ・密を避けるということは、トラブル防止にもなる。一方でみんなの意識を一点に集めることがより難しくなる。自分の保育の幅を広げるいい機会となった。 	<p>保育への新しい視点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・対策ばかりで心の負担が子どもにも保護者にもあることを感じた。保育園が休園でない限り、消毒・マスクなど対策を行った上で子どもたちが楽しいと思える活動をしていきたいと感じた。 ・大人より免疫が少ない分、絶対にうつしたくない気持ちが倍にあった。行事がなくなってしまったこともあり、経験するはずのことが出来なかったのも保育士側としては心が痛いです。いろんなことが制限されている中で出来るだけ今までと変わらない！に近くまでいける保育をしていきたい。伝えたいと思います。 	<p>保育への抱負</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに関わる職種であるため、改めて自分の行動に責任を持って過ごしていなければならぬと強く感じた。 ・手洗い、うがい、消毒を意識するようになった。どうしても子どもと一緒にいる仕事なので密になりやすい。距離を保つことには限界がある。 ・自分たちがなったら怖いので、今までより手洗い、うがいなどをするようになった。 ・0歳児から5歳児まで幅広い年齢の子どもたちと関わっていく中で「もし子どもたちがウイルスにかかったら」「自分がうつしてしまったら」ということを常に考え外出する際は気を付けるようになった。 	<p>保育者としての責任感</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・マスクをしていることで、子どもに呼びかけをしてもうまく伝わりづらい。年齢の低い子どもへのコミュニケーションの発達に影響がないか不安。 ・宮崎はコロナに感染している人がほとんどいない中で、楽しみにしていたことが何もかも中止になっていくのはとても可哀想です。とくに年長児さんは最後の年なので思い出づくりができなくて寂しいです。 ・村なので、町の子どもよりは規制もなく普通に外遊び、水遊びなど何不自由なくできていて幸せだった。感染者が出て休園になるとしたら子どもも親も負担が増え、ストレスもさらにたまると思う。それを出さないため日々の衛生には十分気を付けることしかできない。一日も早く収束して安心して全ての子どもたちが自由に暮らせる日が来てほしい。 	<p>子どもへの思い</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・消毒をこまめに行うように心がけていった。 ・いつも以上に換気や消毒に力を入れた。しかし、自分がもし無自覚感染者だったらという恐怖心は常にあった。 ・感染対策が物資の不足などにより十分な準備が出来なかったことが不安だった。 ・子ども関わるので密は避けられない。 ・徹底した消毒が必要。 ・対策は一人ひとりの行動で変わることを改めて感じた。普段から消毒の徹底はしていたので変わらず続けている。 ・保育園では玩具を共有するのでとくに未満児について、感染防止は難しい。2歳児未満のマスクは不要、逆に危険である。マスク着用で保育士の表情を見ることができない。 ・コロナの脅威(不安)は大人が感じているのと、子どもに伝わること(主婦として)保育園は通常通りということもあり、子どもがいる人は家に子どもを残していることもある。宮崎は感染が大きくなかったものの市町村によって自粛への取り組み方も様々であった。 	<p>感染予防について</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・コロナに対して園ではしっかりと対応し、消毒や密にならない工夫など取り組んだが保護者に家庭での保育をお願いし(在宅勤務や休みの方)声を掛けたがなかなか協力してもらえない家庭が少なく、保護者として「子どもを守る」という意識の低さを感じた。 	<p>保護者への思い</p>

3)「コロナウイルスに関することで、子どもの様子や行動、遊びに変化が見られる」

回 答	読み取れること
<ul style="list-style-type: none"> ・思いっきり体を動かして遊べないためストレスを感じ、激しい遊びをしている。落ち着きがない。 ・ごっこ遊びの中にコロナという言葉が何度か出ている。 ・「コロナだから」と諦めていることを口にするのをよく聞くようになった。その一方で「コロナになりたくない」と手洗いが上手になってきた。自ら予防するようになってきた。 ・自粛されていた家庭の子どもさんの生活リズムに乱れがあった。食事もムラが出てきた。 	<p>子どもの気になる変化</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・行事の延期や短縮により、経験が足りないことや行事への期待感を味わえず、表情も時々暗くなる。 ・休日に自宅で過ごす子が増え、園でも天候の関係で室内遊びになると落ち着きがなく、走り回る子が多くなった。 ・七夕のお願いにコロナ終息のお願い。時々疲れた様子(学童)。 ・休日、家で過ごすせいか、奇声を発する子が多くなった気がする。 ・おうち時間が増え、ストレスが溜まっている。行事等が中止になったため、活動のメリハリがつかない。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・会話の中でコロナという言葉が出てくる。「手を洗わないとコロナになるよ。」 ・健気にマスクを着用している。 ・自ら手洗いをしっかりするようになる。 ・咳エチケットを気にするようになった。 ・手洗いを丁寧にしている。つばが飛ぶことに少し敏感になっている。 	子どもの感染予防の姿

4)保護者からの励ましやねぎらいの言葉

	緊急事態宣言下	現在
心無い言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりする時間がないから預けたい。 	(自由記述無し)
励ましやねぎらいの言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・大変な時ですが、頑張りましょうなど、連絡帳や受け入れの際に会話があった。 ・職員が園庭まで出て、子どもの送り迎えをしていた時にねぎらいの言葉があった。 ・学校が休みになり、預かってもらって助かっています、との言葉がありました。 ・臨時休校で小中は休みで、上の子ども達は自宅待機中だった中、下の子だけでも見てもらえて有り難い、とノートに書いてあり、嬉しかったです。 ・大変ですね、お疲れ様です。 ・行事を実施できるように工夫して頂き、ありがとうございます。 ・対策をしてくれてありがとうございます。 ・配慮していただき、ありがとうございます。 ・このような状況の中でも保育園をあけてくださり、子どもを見て頂き、親も安心して働くことが出来ます。毎日ありがとうございます。 ・コロナで大変な時に保育して頂き、ありがとうございます。 ・学校が休校となり、デイサービスの受入を続けたことに「助かります」などの言葉があった。 ・小学校は休みになったけど保育園は開いているので安心して仕事に行ける、ありがたい。 ・先生たちのおかげで子どもを預けて安心して仕事に行けます、ありがとうございます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者からマスクを寄付された。 ・保育所は通常通りの開園のため助かるとのこと。 ・コロナ対策を考慮しながら、体力・筋力維持のための活動(散歩や室内運動)を計画・実施していることについて感謝の言葉がありました。 ・いつもありがとうございます。 ・在宅ワークが出来ているのは園のおかげです。 ・手作りマスクを保護者の方から、職員分を頂いた。

【考察】

新型コロナウイルスの感染予防として、アルコール消毒液の手指消毒や、飛沫を防ぐためにマスクが重要なため、日本全国でそれらの需要が一気に高まり、マスクの転売騒動が起こるなど日常生活においても混乱した。保育現場においても、それらが反映されていた。学校が休校になる中、保育者は子ども達を預かっていたが、保育者自身も感染の恐れを抱えながらも出来る限りの感染予防策を講じて保育を続けていることが分かる。しかし、これまでより消毒作業の比重が増え、保育者の身体的・心理的負担も増えていると考えられる。緊急事態宣言以降、活動に制限がある厳しい状況の中で、子ども達も何とかこの環境に順応しようと手洗いをしたり、くっつかないように気をつけたりしている。また、ごっこ遊びに「コロナ」が出てきている例が自由回答の記述にあったが、保育者や保護者が頻繁に口にする「コロナ」という言葉と、大人たちの感染予防の行動を見ていることで得体のしれない恐れを感じていると考えられる。田口(2017)は、東北大震災による津波の後に幼児期の子ども達が「津波ごっこ」をして「分断されてしまった時間・空間を津波ごっこにより、つなごうとする心の働きがあるのならば、大人たちは他児の様子にも配慮しながら自然な形で受けとめるのがよいのではないかと報告している。落ち着きがなかったり、生活のリズムが乱れたり、激しい遊びをしている子ども達の姿からも、現在の状況を何とか受け入れようとする心的過程が窺えるのではないだろうか。

自由回答から、この新型コロナウイルス対策において自分の保育について新しい視点や、子どもに関わる仕事の重要性を再認識しながら、行事が中止や延期となる中、「楽しい活動」を保育者の知恵と工夫により行っている。仕事と育児を行っている保護者から、緊急事態宣言下において励ましやねぎらいの言葉が多くあったのは、先行きが不透明な中で、子どもを守り、預かってくれる保育施設関係者への感謝の気持ちと専門職への厚い信頼の証である。

今後の課題として、このアンケート調査は感染が落ち着いていた状況の中であり、感染が拡大していた他の地域と比べると一概には言えない点が多くあると考える。保育現場で、この新型コロナウイルス対策を行いながらどのように日々の保育に奮闘し、向き合っているかを検証するには更なる調査を続けなければならない。

引用文献

田口久美子(2017)「東日本大震災後の子どもの発達についてー幼児期から学齢期に着目してー」心理科学 38(1),38-54

参考文献

厚生労働省 (2018年3月)「保育所における感染症対策ガイドライン (2018年改訂版)」

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000201596.pdf>

厚生労働省「保育所等における新型コロナウイルス対応関連情報」: 令和2年7月10日(金) 12:00更新

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09762.html

厚生労働省「保育所等における新型コロナウイルスへの対応にかかる Q&A について (第六報)」(令和2年6月16日現在)

<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000640495.pdf>